山城閻歩

2月例会資料

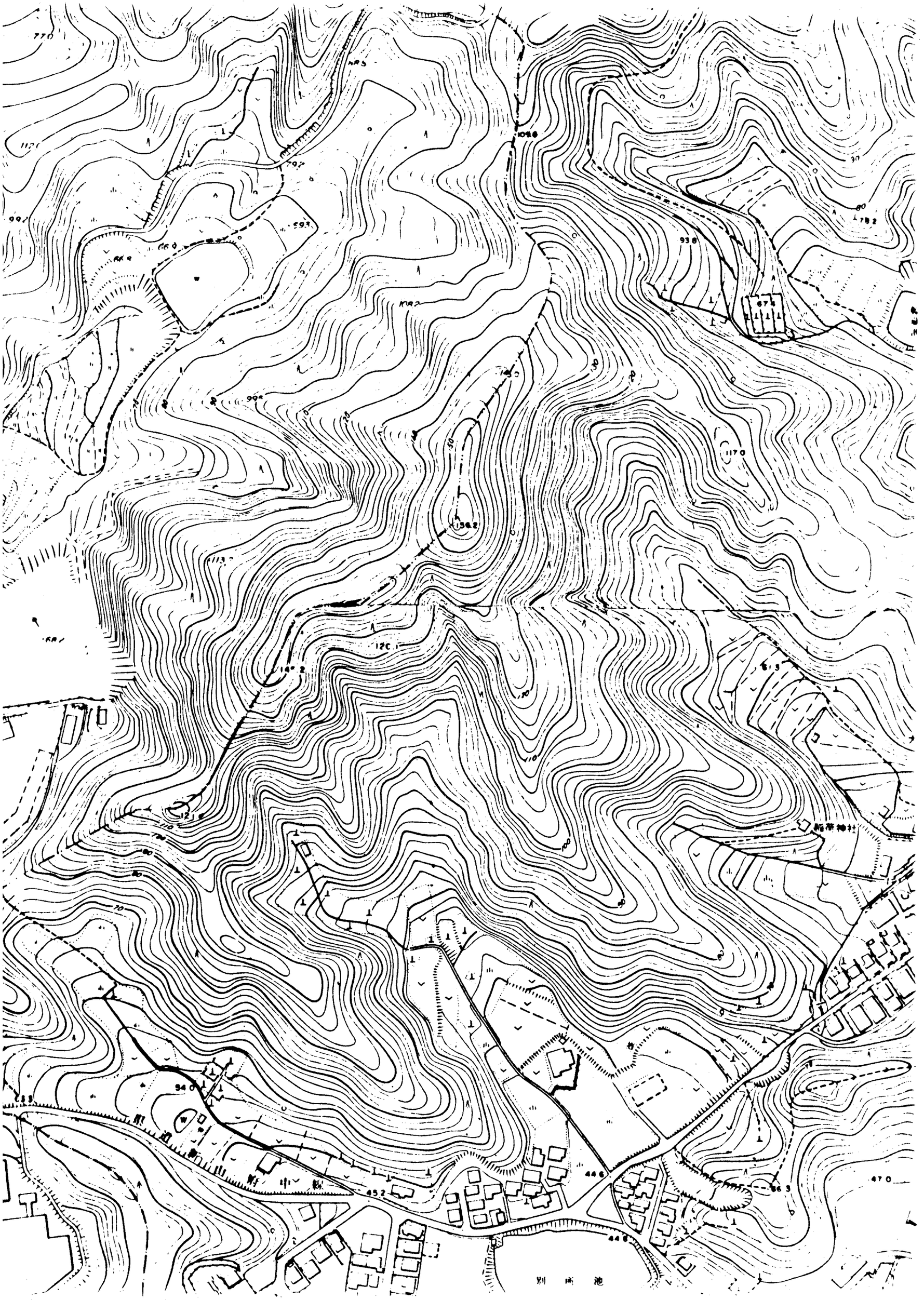
吉備津神社

鳶尾山城

桜山城

中興寺

亀寿山城



古代の新市

古代の新市付近は、吉備品治部国造（ホムジベクニノミヤツコ）が統治をしていたと思われる。品治部（ホムジベ）（品遲部、誉津部）とは、垂仁天皇と皇后の間に生まれた本牟智和気御子（ホムジワケノミコト）（誉津別尊）の為に、各地に置かれた部民集団で、天皇の直轄地である。

神田郷という郷名があり、これは、吉備津神社を中心とした、安井、宮内、新市の事と考えられる。

なお、吉備国が三備に別れたのは、天武朝（672～682）の間に分かれた説がもっとも有力である。

〈古代の遺跡〉

宮脇（常）遺跡　県史跡　　縄文早期、後期、晩期

先土器時代の細石器も出土した。

神谷川遺跡、県史跡　　縄文晩期　弥生中～後期

神谷川が芦田川に合流する手前の東岸、標高40～80mの丘陵で、高地性集落跡。

尾市古墳　　古墳時代後期

石室は南西の方向に開口して、羨道の奥に東、西、北の三方に石棺を組み合せ、石室内の平面は十字形である。

常城　　奈良時代

「続日本紀」養老3年（719）12月の条に、「備後国安那郡茨城・葦田郡常城」と記載され、大字常と本山町の境の鬼ヶ岳の東北1Kmの火谷山一帯が城域と推定される。

神社の概観

神社の敷地は、普通次の様に分けられる。

①神聖区域　神霊を鎮座する本殿の位置で禁足地である。

②神厳区域　本殿位置に準じ、権殿(ゲンデン)、神庫(シンコ)、摂末社(セッマツシャ)の敷地。

③清厳区域　祝詞殿(ノリトデン)、拝殿(ハイデン)、神饌所(シンセンショ)、神輿庫(シン)、祭器庫等の敷地。

④清雅区域　社務所、斎館、神楽殿、雑器庫、神門、手水舎等の敷地。

⑤自由区域　余地のある土地、参拝者の休憩所、絵馬殿、舞台等、神賑ひに関する催し物をする敷地。

桜山神社　　正四位

明治44年に現在地に移転され、元は、桜山城に有った。

祭神　桜山茲俊

将士21人を相殿に合祀する。

光成新三郎興家　　馬尺家町上山守　近江城

桑原伊賀守重信　　〃　服部本郷　泉山・椋山城

目崎左近将監忠康　　神辺町　御領　茶白山城

重政平左衛門尉光兼　　〃　龍王石山城

佐波越中守可美　　佐波町　佐波城

内藤河内守宋豊　　豊松村　新庄山城

江草和泉守元忠	加茂町山野 串之丸城
高尾九郎次郎元行	神石町 高光 馬場城。
高尾 小十郎 元広	神石町 福永 高尾城
有木 中務丞 頼弘	豊松村 有木 中山城
広沢五郎基実	神辺町竹田・因島城
勤王沙門青目寺弁房	府中市本山町 青目寺 別当
竹内弥次郎兼幸	上下町 有福 鍋〃 山城
正五位 村上三郎左衛門義弘	因島中庄 青影城
日隅若狭守元政	新市町 常日隅城
有木小次郎俊信	〃 宮内 鳶尾山城
遠部山城守資房	(松永市) 西町 山王山城
〃 次郎資治	〃
木野山治郎左衛門吉行	(協和村) 木野山城
桜山平太郎盛重	
桜山左近将監義政	

吉備津神社

吉備津彦命（キビツヒコノミコト）

- 倭国香媛（ヤマトクニカヒメ）（紐某姉（ハヘイロネ））
  - ‖ 吉備津彦命（ヒコイサセリヒコノミコト）（孝霊五十狭芹彦命）（皇族神）
- 孝霊
  - ‖ ? 稚武彦命（ワカタケヒコノミコト）（吉備氏の祖）
- 姉妹
- 紐某弟（ハヘイロト）

日本書紀による系図

孝安
- 大吉備諸進命（オホキビモロススミノミコト）
- 意富夜麻登久遍阿礼比売命（オホヤマトクニアレヒメノミコト）（八代目）
  - 大吉備津日子命（オホキビツヒコノミコト）（比古伊左勢理毘古命（ヒコイサセリヒコノミコト））（吉備上道臣の祖）
- 孝霊
  - 若日子建吉備津日子命（ワカヒコタケキビツヒコノミコト）（吉備下道臣・笠臣の祖）

八代目

古事記による系図

「吉備津宮勧合略記」

天津御祖（天照大神）の国を開き、国の御柱（治政）を立て、磐境（神の教え）、神籠の道を以て、天下を治め給うには、聖の徳、増しますと共に、自用いずに、ひたすら天の神をいただき奏り、八百八十八の神に仕し奏りて、共、もとつぎ（この神々といっしょに）出給うる所の神、及び、国土山川草木の神霊までを祝ひ祭り、其趣を施し給う。故に葦原（日本）の中津国となる。八の夷（えみし）も王化にそむかず、天津日嗣（天皇・天子）とこしなへにして、神代より今に至るも、このことわりにて、祭を先々にして、たて給べる政なればなりとぞ、猶、神と神、皇と皇、御（先祖）

(代々伝わる)
祖傳の御上には、ちりまたる旨ありて、凡人の知るべき所にあらず。是を一体とも祭政一致とも申し奉るよし。天地の間、又、なきめでたき国のならわしとぞ承る。故に代々の帝も、此、御心をうけつき給かて、国々所々に神籠をおこしたて、春秋の祭り、おこたりなく、(絹)幣を捧げ、或は、神位を加え給う。是より、皇統無窮、鎮護国家の政の始なり。

中でも我吉備津宮は、仁徳天皇の告によりて、吉備の中山に五つの神殿を造り、72社を治め給ひし、後に推古天皇の時、有木氏の祖が、吉備後国品治郡に宮所を求め、3つの神殿をおこしたて、(磐座・神籬)下津岩根動きなく。高天原に持風高しりて、同年6月に今の宮所にふりわけ奉り、鎮め祭りて、朝家の御守となり、国を鎮め御座す。

祭神　孝霊天皇、吉備津彦命、細比売命、稚武吉備津彦命
以前は本殿の北に孝霊天皇、南に吉備津彦命の二社に分れていたが、後に一社となった。この神社が確実な史料に出て来るのは、平安後期である。

境内社に十麻里二柱神社、十二神社、天神社、大山祇神社、秋葉神社、四所神社、武内神社、多理比理神社。

輪蔵合戦

応仁の乱の時、山名是豊が率いる東軍と宮氏を中心とした西軍が輪蔵池付近で合戦を行なった。後、宮氏降伏。

山城の概要

丘城

丘陵を城地として使用した城。平山城の山頂のみを使用。

里城

中世山城を構えた時、平時の居所として、山の麓に設けた、根小屋程度の防禦施設を施した城。

館

土塁、壕等の防禦施設を施した、地方豪族の居所。

詰の城

本城の背後を警戒すると共に、本城が支えきれなくなった時、最後の拠点となる城。　普通、幾つかある味方の城の中で、一番奥まった所にあり、峻険な山上で、本城から距離的にもさして遠くない城。

郭（曲輪）

傾斜地を削平して造り出す平面。普通高い面を削り、低い面に盛り上げ水平にして、周縁に土塁を築き、周囲から、侵入しにくい様にした平面。

帯郭

尾根上の郭の側面山腹に取り付いた細長い腰郭。

腰郭

帯郭と同意に使われる。又、稜線からそれて側面にあるものを袖郭とも呼ぶ事がある。

捨郭

主郭の前面に設けて、出撃の陣に用いられるが、守勢となれば、放棄する郭。主郭の方向は土居や柵は用いない。

出丸

主郭から離れて用いられた郭。敵軍を遠方でとらえ、主郭の防戦体勢を有利にして、敵軍を挟撃したりする時にも用いる。

堀

堀は土塁と一体となっているのが普通で、水堀、空堀があり、土塁等が崩れたりするのでその安全面等からも、種々の堀切り方がある。

毛抜堀

空堀の断面が毛抜き道具を表れた様に底に丸口味がある。

障子堀

堀の底に障子の桟状の畔を縦、横に組むか、柵を組み、敵を堀

庶の畔、柵に留めておく為に設ける。

捨堀

城から100～200M離れた所に、敵の障害として設ける。

竪堀

敵兵が横への移動が可能な時は、竪状に深く堀り切って、横への移動を不可能にする。

堀切

連続する峰、山頂部の長い尾根を城地とする時、敵方の攻撃を阻止する目的から、各郭部を区画し、峰、尾根を何条かに掘削した構造。

薬研堀

土居の様に勾配をとって掘る。普通は約45°の傾斜が土塁が崩れにくい為にその様にしている。

鵜尾山城

有木氏、宮氏、桜山氏が居城したと云われる。

有木氏は吉備津神社の宮司として備後に下向したと云われ、元弘元年(1331)の桜山氏挙兵の時にそれに呼応したと云われる。

有木小次郎俊信　神石郡有木村中山城より此へ移る。

元は桜山慈俊家老、桜山氏没後自立す。

有木五郎俊雄　此代に没落す。

有木藤左衛門尉盛安　俊雄より数代あり。

有木民部丞忠宗　盛安の子

宮下野守貫信入道　天文年中

山頂に郭、堀切が有る。標高約150M。

西国33ヶ所、

平安末期から始まったが、処々に新33ヶ所が出来たのは、普通、江戸時代から明治と考えられる。33ヶ所観音巡札は西国と、坂東と、秩父があり、この3ヶ所を行くと、秩父だけは34ヶ所として、100番回る事になる。この3ヶ所を行って、百番巡拝塔を建立する者が出て来る。

この33ヶ所は観世音菩薩は33身に応身すると「観音経」に説かれている為に、此様になった。

楊柳、童頭、持経、円光、遊戯、白衣、蓮臥、瀧見、施薬、魚籃、徳王、水月、一葉、青頸、威徳、延命、衆宝、岩戸、能静、阿耨、可愛提、葉衣、瑠璃、多羅尊、蛤蜊、六時、普悲、馬郎婦、合掌、一如、不二、持蓮、灑水の各観音が33観音であるが、西国、坂東、秩父の33観音は6観音、7観音が重複して祀られている。

6観音

天台宗教(台密)の場合

大悲、大慈、師子無畏、大光普照、天人丈夫、

大風深遠の6観音。

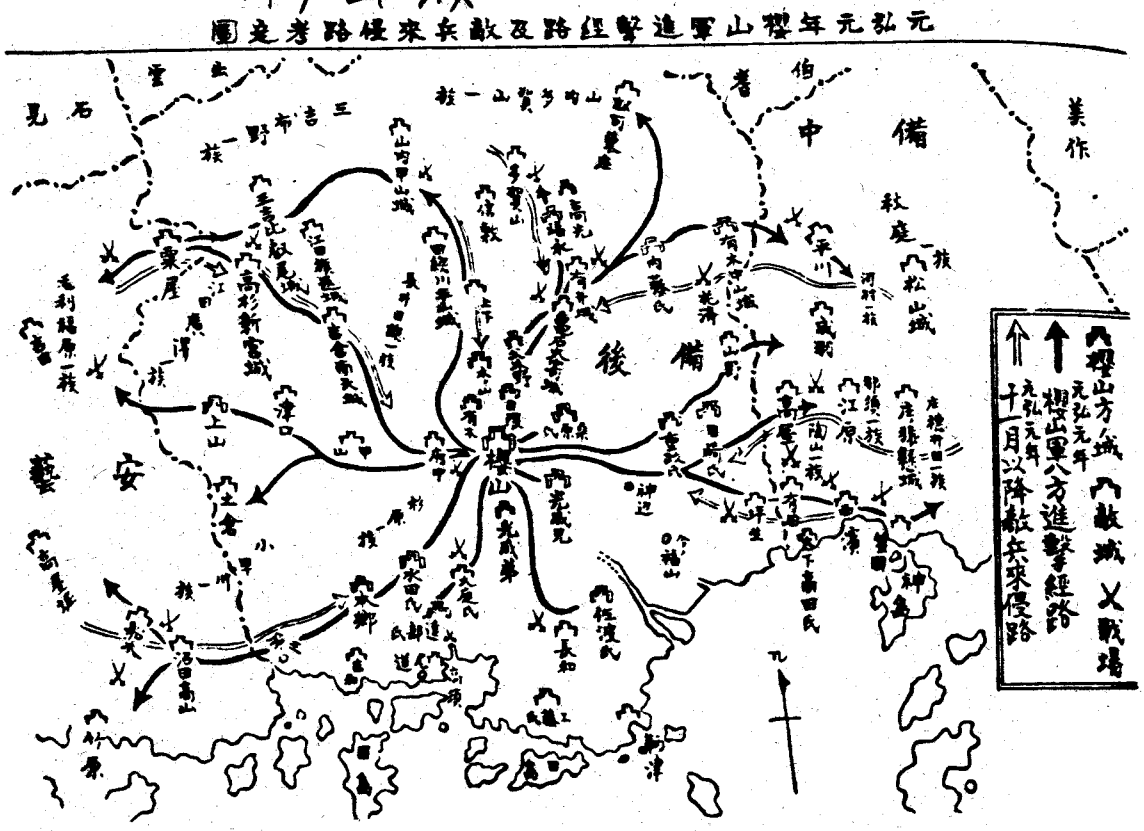
真言密教(東密)の場合

聖、如意輪、千手、不空(准胝)、十一面、馬頭、の6観音となり、不空と准胝はどちらかが入っている。

7観音

千手、不空、聖、大日、十一面、如意輪、馬頭 の7観音が祀られる。

桜山城



桜山四郎入道茲俊、宮氏の分家が桜山と名乗る。

甲奴郡、三原市に佐倉山城、桜山城があり、そちらが出自とも云われる。

土居

有地民部少輔元盛

〃 美作守正盛　天正年中、太閤秀吉公、諸国山城停止により、佐賀田山城をひらき、此地に屋敷を構え居住す。

尾関讃岐　福島正則の臣

桜山城の東北尾根の薬師堂と云われる。

中興寺

曹洞宗、山号定光山、本尊釈迦如来、

開山は鎌倉建長寺第二世仏国禅師　草創嘉元3年(1305)

元弘2年(1332)桜山氏の兵火により灰燼、亀寿山城宮氏再建。

桜山慈俊木像と位牌がある。

四国88ヶ所

何時より始まったのか定でないが、平安末期の修行僧が廻ると云う「今昔物語」の説から、江戸時代からと今う説まである。

88という数字は、「八十八見惑」から来たという説もあるが、熊野99王子との関連から88と云う数字になった。(もともと熊野99王子は、88しかなかった。それが、口遊口承上から99と云う数字になった。そして元々の88という数字が四国の遍路に影響を与えて、基盤の固まっていなかった遍路が88という数字に固まる。)

石鎚山

伊予石鎚山に対する信仰は古代より始まり、平安初期に著さ

れた「日本霊異記」にも記されている。江戸末期より参拝者が増え、それと共に、神社も勧請される。石鎚山へ参拝して帰ると、地元の石鎚社も参拝した。

車神社

建御雷神、経津主を軍神として普通は祀っている。源家は、八幡大神を武神、氏神として祀ったので、一般にも武神として祀られる。

兵術家は北斗星(第七の星が破軍星)、摩里支天、勝軍地蔵、三宝荒神 夜叉神、を祭る。

福塩線

明治44年11月、河相三郎を社長とする両備軽便鉄道が設立された。大正3年7月21日開通式が行なわれた。
此時の路線は吉津町の両備福山駅から奈良津の隧道を経た後は、現在と同じ路面を通行した。

最初の原案では、現在の網管バイパスの道(千田町の東)を通行する予定であったが、千田、中津原の村民が、「横尾、新茶屋、三軒家等が衰微させるので、千田村坂田を経て、横尾、新茶屋、三軒家、万能倉のルートに変更してほしい」と請願が出される等右往左往となった。

大正15年6月、両備鉄道(株)と改称し、昭和2年6月から電気機関車の使用を開始。昭和7年1月、ガソリン車の使用開始。昭和8年9月、両備福山～府中町間が国に買収される。

亀寿山城と宮氏

田口義之

福塩線の新市駅に降りたって北を眺めると黒々とした山が眼前に迫って見えます、この山が本日のテーマの一つの亀寿山で、南北朝時代から戦国時代まで備後最大の豪族宮氏の居城のあったところです。本日はこれから実際に城跡に立って城の遺構を見学する予定ですので城跡については添付の図面と現地での説明に任せることにして以下、城主宮氏についてのみ簡単に述べてみたいと思います。

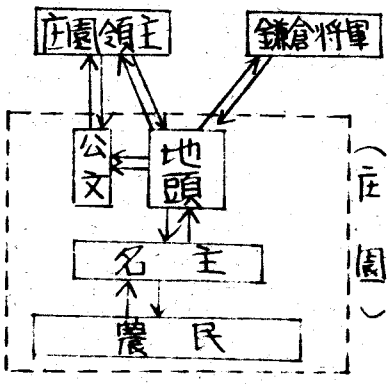
宮氏とは

まず、城主の宮氏はいったい何者だったんだろうか、という疑問ですが、これはなかなか説明の難かしい問題です。一般的な中世武士の存在型態についてですが鎌倉時代には「地頭職」とか「下司職」の保持者が武士＝侍といわれる者でした。誤解があるかと思いますが、例えば長和庄（福山市鞆町にあった）の「地頭」長井氏といっても長井氏が長和庄を一元的に領主として支配していたわけではありません。この時代には一つの庄園の領主権者として京都に「本家」「領家」が居て、地頭はそれら中央の領主（庄園領主）にかわって現地を支配（管理）し、農民から年貢を徴収してそれを京都の庄園領主に送る義務を負っていたわけです。そして、その返対給付として年貢の一部を自分の得分とすることができました。（在地領主）しかし、実際に苦労し

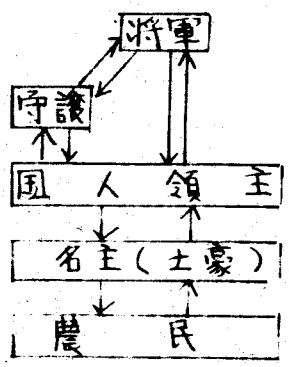
て庄園を管理している地頭達にとって年貢の大部分を何もせずに詩歌管弦の遊びにうつつをぬかしている京都の貴族達に送ることほど腹立たしいことはありません。彼等はどうにかして年貢や土地を自分のものにしてやろうとします。これが地頭の「庄園侵略」といわれるものですが鎌倉幕府はそれら地頭達の要求や不満に対して圧制をもって答えました、本来地頭達の支持によって成立した幕府としては主客転倒の対応ですね。これを北条氏の「得宗(とくそう)専制政治」と呼びますが幕府の圧制に対して地頭達はどうしたか、結論を言へば彼等は幕府を見限りました。これが後醍醐天皇による「建武の中興」が成功し、鎌倉幕府があっけなく滅んだ原因です。その後いろんな要因が重なって南北朝の内乱が長く続きましたが、明徳3年(1392)、足利義満によって南北朝の合一が実現した頃には彼等鎌倉時代の地頭達の後裔はどうなっていたでしょうか。この頃になると彼等は庄園をほとんど自分のものにし、いわゆる「国人(こくじん)領主」と呼ばれる存在になっていました。彼等は一応は小額の年貢を庄園領主に名目的に送りましたが在地はほゞ完全に彼等のものでした。そして本日のテーマ『宮氏』は南北朝の内乱の中で大きく成長してきた国人領主だったわけです。前置きが大変長くなってしまいましたがもう少しつけ加えさせていただければ国人領主は前代の地頭達と違って実際の農業経営には直接タッチしないという特色をあげることができます。この時代ももちろん農業経営をしながら合戦の時には鎧い甲とに身をかためし出陣するといった

武士もたくさんいました。しかし、現在の学説では彼等は「土豪」と呼ばれて国人領主とは区別されています。更に言えば、土豪は国人領主の下に位置していました。つまり、国人領主の下に土豪がいて両者は主従関係で結ばれていたわけです。宮氏についていいますと、宮氏は自分では土地を耕しません、宮氏の領有する庄園の田畑(名田(みょうでん)という)は、宮氏によって輩下の土豪に宛行われ、土豪は土地をもらって農業経営を保障してもらう(御恩)かわりに、宮氏が合戦に出陣する時は自分の下人や所従を引き連れて宮氏のもとに馳せ参じて軍忠を励んだ(奉公)わけです。現在、「備後古城記」をひもといて見ますと各村の古城主のところに「宮氏に属して云々」の言葉が記録されていますが、彼等のほとんどは宮氏輩下の土豪だったと思われます。服部の桑原(くわはら)氏、上安井の日隈(ひぐま)氏、宮内の有木氏、神石郡の村田氏、馬屋原(まやはら)氏等がそれです。

(鎌倉時代)



(室町時代)



南北朝期の宮氏

宮氏が歴史上に現われるのは南北朝時代からです。「太平記」巻7、船上合戦事(ふなのうえ)によりますと、

元弘3年(1333)閏2月27日、後醍醐天皇が隠岐から伯耆船上山に還幸されると、備後の江田、広沢、三吉氏等と共に宮氏もいち早く味方として馳参じています。しかし、南北朝期の宮氏の活躍で特筆されるのは何と言っても亀寿山城初代と伝えられる宮下野守兼信入道道仙の活躍でしょう。彼は終始足利将軍方として行動し目ざましい活躍をしています。特に貞治元年(1362)、足利将軍に敵対する足利直冬が大勢力を引具して宮内に陣して亀寿山城を攻撃した時には「天下に一人も宮方という人なく成て、佐殿(直冬)も頼む方なく成せ給ひたらん時、さりとては『頼むぞ』と承らば もし頼まれ進する事もや候はずらん、今時近国の者共多く佐殿に参りて勢付せ給う間、当国に陣を召れて参れと承らんに於ては えこそ参り候まじけれ、憑し其儀ならば討って進ぜよとて、御勢を向けられば かばねはたとえ御陣の前にさらされる共、魂は猶将軍の御方に止ってうら又を泉下に報ぜん」と直冬の降伏勧告を断固しりぞけ、1年余りの籠城に耐えて貞治2年9月、ついに反撃に転じて直冬の軍勢を退散させた、いわゆる「備後宮内合戦」などは彼の面目を今に伝えるものです。この時、口さがない京童は次のような落首を路端に立てて直冬のふがいなさを笑ったといいます(太平記)。

「直冬はいかなる神か罰にてか宮にはさかゑ怖て逃らん」

又、作大将の毛利備中守(元就の先祖)が真っ先に逃走したことを諷して

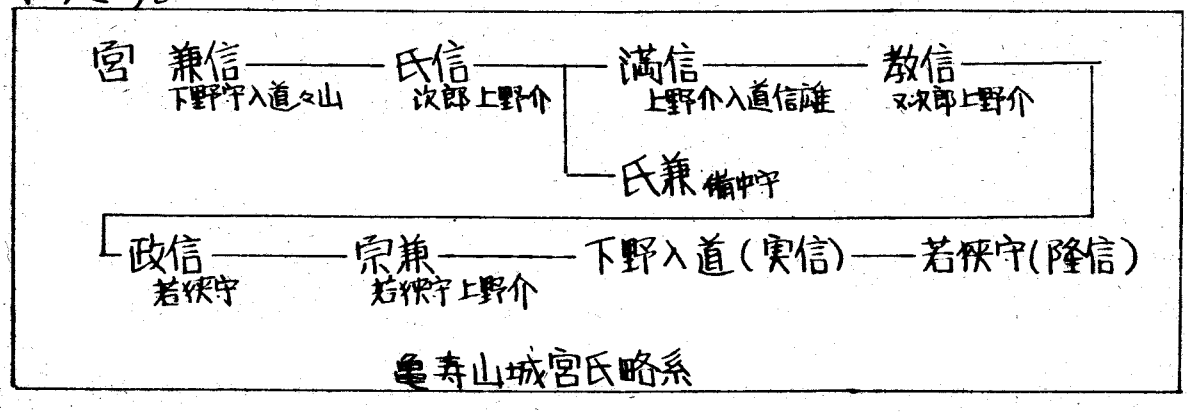
「猶の葉のゆるぎの森にいる鷺は深山下風に音をや鳴らん」

足利幕府もこの兼信の功を認めたのでしょう、この合戦後備中国守護職に任じてその功にむくいています。現在、「大日本史料」を見てゆきますと、兼信が備中守護としても活躍していたことを証する文書を数点見ることができます。このように宮氏は兼信の活躍によって大きく勢力を伸ばし、次の室町時代に備後屈指の有力国人として活躍する基礎を固めたわけです。

室町時代の宮氏 与えられた紙面もわづかになってきました、先を急ぎましょう。室町時代の宮氏の特色をひとつをピックアップするならば それは室町幕府奉公衆の一員となっていた~~ことは~~ことです。当時は「守護領国制」といって一般の国人領主は守護大名の被官(家臣)として幕府―守護―国人というラインで支配階級を構成していましたが国人の中でも有力者は守護を経ずに直接幕府に結びついていました、彼等のことを「奉公衆」とか「直勤御家人」と呼びます。幕府にとっては地方の守護に対する目付け役、幕府の地方拠点として守護ににらみをきかせる存在だったわけで又、将軍の直轄軍としても重要な意味を持っていました。江戸時代でいえば「直参旗本」といった地位です。宮氏は一般の国人より有力で地位も高かったわけです。

室町時代の大事件といえば「応仁の乱」です。幕府の権威を失墜させ、戦国乱世をまねいたことでも有名なこの戦乱で宮氏、特に亀寿山城の宮氏はどうしていたのでしょうか。こ

の時期の当主は宮若狭守政信ですが「小早川家文書」等によると彼は宮五三郎盛忠という者とペアを組んで（備後両宮）西軍の山名持豊（宗全）に味方しています。今、彼の行動を詳しく述べる余裕はありませんが文明年間（1469～78）、安芸に出陣して両小早川氏の和平の斡旋をしたり、備中に進出して阿哲郡の野部新城、八島城を攻略しています。この時代、備南、特に品治郡南部（新市町南半 福山市駅家町）、安那郡北部（神辺町 福山市加茂町、山野町）、沼隈郡東部（福山市瀬戸草戸、熊野町等）御調郡（尾道市吉和、御調町）等に宮若狭守の勢力が及んでいたようです。



亀寿山城宮氏略系

亀寿山落城

応仁の乱は文明9年（1477）、京都で東西両軍の首領による講和が行なわれ一応の結着がつきますが、戦が無くなったのは京都のみで地方では益々その激しさを増して行きます。前述の通り城主の宮氏は西軍の有力武将として活躍しましたが、その後、備後国内では山名俊豊を守護として押す山内直通一派と俊豊の父政豊を守護として立てようとする江田、和智氏を中心とする一

派との間で明応7年(1498)までの間、国内を2分して激しい争いが続きます。結局この争乱は政豊の死去によって「うやむや」になってしまうのですが この期間の宮氏の動きははっきりしません、ただ、同族の宮政盛は「山内首藤家文書」によって山内直通方に好意を示していたことが知れるのみです。

戦国時代の備後国は山陰から南下する尼子氏と周防山口を本拠に勢力を拡大する大内氏の争奪の場であったといえます。このような形勢の中で城主宮氏は はじめの内は大内氏に味方して諸方に後詰として出陣していますが、大永年間(1521～27)、尼子氏の勢力が急伸すると尼子氏に属したようです(陰徳録等)。享禄から天文9年(1528～40)にかけては尼子氏の全盛期で備後も庄原の山内直通を始めほゞ尼子色にぬりつぶされます。宮氏もこのような情勢下で尼子方にくらがえしたものと思われます。これに対して大内氏も勢力の挽回を策します、大永6年には当時有能な武将としてめきめき頭角を現わしていた安芸の毛利元就を味方につけ、彼に備後の攻略を命ずるのです。そして、大内氏の命を受けた元就は備後に兵を出し、当亀寿山城を攻囲したのです、天文3年(1534)、2月上旬のことです。　当時、城主宮下野入道は「備後国主」を称し、尼子方の最有力者でしたから、毛利元就が先ず一番の目標に亀寿山城を選んだのは"さすが"と言わざる得ません、つまり、一番の有力者を屈服させれば他は恐れて大内氏になびくだろうという計算です。これに対して宮入道も自信満々で迎え打ちます。ある本

によりますと 入道はこの合戦で元就を討ち取り、返す刀で安芸の吉田まで攻め取ってやると豪語したそうです。この合戦では宮氏麾下の土豪達、神石郡の馬屋原、高尾、村田氏等も各々軍勢をつれて亀寿山城に入城しています。 ところが、運命は元就に軍配を上げました、宮入道は風病にかかり急死したのです。あとには幼ない嫡子若狭守のみが残されました。むろん、城主が死んだからといって直ちに降伏しなければならないという法はありません、城方では家老丹下左兵衛尉(たんげさへえのじょう)が幼主を擁してあくまで抗戦します。7月に入っても城は落ちません、合戦は長期戦となりました。ところで、やはり城主宮氏の命運は尽ていたようです。10月に入って城方の柱石ともたのむ丹下左兵衛尉が戦死してしまったのです。城内は陰うつな空気がただよいました。そして、遂に10月中旬、降伏 開城したのです(陰徳記、芸陽録、西備名区等)。

降伏した若狭守は領有を許された安那郡内の城に移りますが、その後の亀寿山城に就てははっきりわかりません。一説によれば古志三郎左衛門景勝(しきぶさうざえもんかげかつ)という者が城代として入城したともいいますし、「備陽六郡志」等によれば宮刑部(ぎょうぶ)という者が居城したともいいます。宮刑部は「厳島文書」によりますと実名は元理(もとただ)といい、天正年間(1573~91)毛利輝元の家臣として活躍しています。或は本家の退去後、一族で早くから毛利氏に属していた者が毛利氏の許しを得て入城したのかも知れません。 猶、宮若狭守のその後ですが(紙面切れ!)

以上、簡単に亀寿山城主の宮氏について述べてみました、見学に際して皆さんの参考になれば幸いに存知ます。おわり

＊御　池

昔はここでみそぎをして罪穢を祓って一宮様にお詣りしました。

三池合処架長橋　橋上展望美景饒
西備一宮神社下　水鳥得々共波搖

＊節分祭灯放談神事

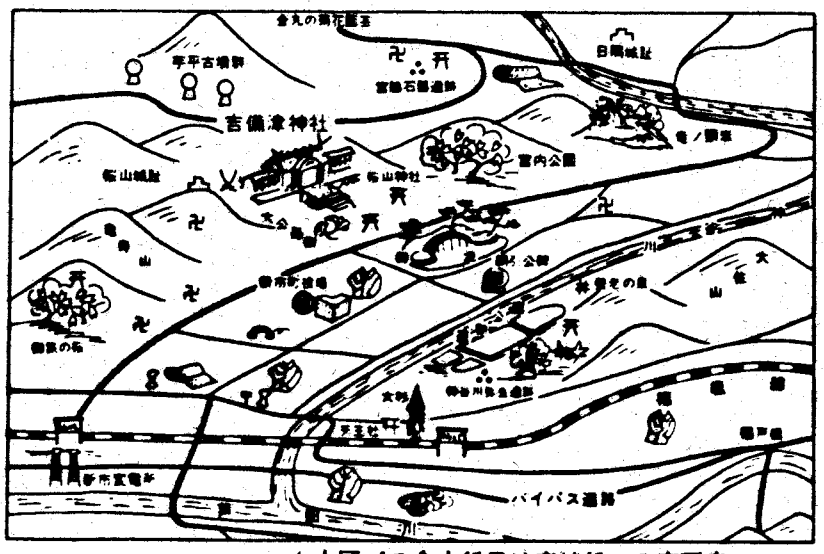
天下の奇祭で、五穀豊饒を祈る人々が遠くは京阪神、下関方面から陸続として参拝して、赤々と燃え上る祭灯を囲んで、年送りの夜籠に退屈しのぎに、伝説に誇大妄想に、面白可笑しく、所謂腹絶倒長夜を世間話に花を咲かせたのが滑稽であって、ほらふき競べといわれた奇習を醸成するに至ったのであります。NHK、中国、広島、山陽テレビ等は毎年節分祭にこの放談の奇習を全国へ放映しております。

＊綿引公金村と至孝堂

公は年八才の幼少にして病床にある両親に孝心篤く、山に薪を伐り、川に漁して生活に当てていたが、称徳天皇の天聞に達し、神護景雲二年（七六八・吉備津神社創建三八年前）嘉賞して爵二級に叙し、終身田租なし。天は孝心に感応、水変じて酒と化す。この奇泉を名づけて「酒渓池」といい、のちに養老の酒泉といわれました。

天保年間（一八三〇～）庄屋林吉勛深く公の孝誌を追慕し、公の故跡神谷川左岸に一舎を建て、時の福山藩儒衣川閑斎を招じて道を講じました。これを「至孝堂」といい、のち「至孝堂碑」が建立され、閑斎の碑文があります。

新市局風景印
○吉備津神社本殿と本道こま犬及び備後神を語る高尾山を配す。



福塩線新市駅下車｜中国バス金丸行又は東城行一の宮下車
タクシー5分

備後一宮　吉備津神社

広島県芦品郡新市町宮内　電話(0847)51-3395

備後一宮

吉備津神社由緒

觀光案内

皆様これから一宮様へ御案内申し上げます。

＊大　鳥　居

まず、この大鳥居は今から三百三十年前、慶安元年（一六四八）時の権勢ある福山城主水野勝成公が、誠心こめて御本殿以下御寄進御再建になりました時のもので、第百六代後陽成天皇の皇子、尭然法親王の御書になった銅の扁額が掲げてあります。縦一八〇センチ、横一四〇センチの優雅なものです。

＊公　孫　樹（天然記念物）

左の公孫樹は天然記念物（日本老樹名木第四一五号）であります。天を摩すばかり、春は緑、秋は黄金の錦を織りなして、燦々と光に映えて人々の心を明らかにします。この大広場は毎年十一月二十三日（勤労感謝の日）より四日間中国地方屈指の名高い市立大祭（イチダイ）に、各種興行が露天商数百と共に天幕を展張して、メロディー華かに、秋の収穫を賑い祝う近郷近在の人々のオアシスであります。

＊桜　山　神　社

右の赤瓦の御社は南朝の英傑、桜山茲俊公を奉斎してあります。

時は元弘元年（一三三一）天下は乱麻の如く、英邁なる後醍醐天皇には王政復古の勅を下して、諸国に勤王の士をお募りになりました時、大楠公と桜山公の二大忠臣は、率先して忠勤の義旗を翻し、東西相呼応して大義名分を唱え、討幕の急先鋒として義兵を挙げ、各地に転戦、偉大なる勲功を輝かしましたが、終に戦利あらず孤城天下の大敵を引受け、勢窮るや妻子眷族と共に城を枕に自刃されました。公の古今無双の義勇殉国の至誠は、後世の人の亀鑑と仰がれ↗

強い感激を与えております。松吹く風も六百五十年前の桜山公の偉大な勲功をささやくように、われわれの心に脈々とした感動を呼び起させます。明治天皇は公の遺徳を嘉せられ、明治三十六年正四位を追陞され、元官幣大社吉野神宮の攝社船岡神社に奉斎されました。

尚この一宮神城一円は建武中興六百年記念に際し、昭和九年文部大臣より史蹟一宮 桜山並俊挙兵地 として指定されました。

桜山公を詠んだ詩歌に

楠の木の蔭にはたてど桜山　幾世の春も花や香らん

欲逢挙族合官軍　誤報使公摧鉄筋
忠魂長眠鳥尾岳　白桜何劣翠楠勲

＊随神門

全国に随神門の二つあるのは備後一の宮のみであります。

暫く悠遊なありし昔の由緒の伝説を播いてみましょう。

縁結びの神様として名高い出雲の大国主命は、十月の神無月に全国の八百万神々を神集えに集え給うて神政（神の政治）の、今でいう国会を開かれたのであります。世界広しといえども神政国会は日本が最初でありましょう。明治天皇御発布の五ケ条の御誓文の一つにある「広ク会議ヲ興シ万機公論ニ決スベシ」と宣らせ給ったように、神意発表の浦安の国の誇りの集でありました。

国々の神々は八雲立つ出雲へ〳〵と喜び勇んで集合されましたが吉備津彦命のみ欠席されました。大国主命は殊の意外に案じられて使者二名を当地に差遣して至急出頭を促がされましたが、昔から名だたる市立大祭の神賑は筆舌に尽し難く、いとも殷賑に執り行われていました。遠路遥々の御迎えの使者に対する歓待は至れり尽せりの善美を極めました。終に手弱女の美しき乙女と妹背の契りを固く結んで復命せず、吉備津彦命の覩衛の門守として末永く仕えたために、上下随神門のある理由がわかったことと存じます。神集えに集えて出雲に出頭された神々の国は神無月であり、当国は神有月で、面白いエピソードでありましょう。

＊寒　桜

日本に稀な寒桜は、十一月から三月頃まで寒風吹きすさぶ雪の中に雄々しくも可憐な花を開いて、参拝者を微笑しめて暖い心に融和させます。

＊御　本　殿

備後国総鎮守一の宮でありまして、御祭神は吉備津彦命を奉斎してあります。通称一宮（イッキュウ）さんと親しみをもって呼ばれております。第七代孝霊天皇（前三四二～二一五）の皇子で、第十代崇神天皇の御代（前一四八～）四道将軍に任ぜられ、山陽道に派遣されて人民を愛撫して、農業に海陸の交通に、地方開拓に偉大な功績のあった吉備開国の恩恵神であります。（四道将軍＝北陸－大彦命、東海－武渟川別命、西道－吉備津彦命、丹波－丹波道主命）

大神の御高徳を仰ぎ尊んで初めて宮内にお祀りしましたのは、平安時代第五十一代平城天皇の大同元年（八〇六）であります。

現在の御社殿は慶安元年（一六四八）福山城主水野勝成公が造営されたもので、昭和四十年三月、国の重要文化財に指定されました。

神風に真清の鏡かけまくも　曇らぬ御代の影をうつして

*虎睡山額

この山の姿を遠望するに虎の眠っている鞋があります。虎は勇猛であり、大神の勇猛言うも更なり、符合の地で虎睡山と号しました。

*向拝の竜

竜は風を起して雨を呼ぶという火災除のために据えてあります。

*公孫樹（乳房神）

昔から安産乳神様として信仰篤く、幾多の御霊験いやちこと称えられております。

*かりんの木

猿滑に似た珍種木で、薄桃色の花を咲かせます。果実は夏蜜柑大で、黄色に熟し強烈なりんごの臭いを放ちます。肺病、心臓病に特効があると伝えられております。

*十二神社

御本殿の南の小高い地にあり、讃岐の金比羅様や出雲大社の御祭神である大黒様を始め、十一柱の神々をお祀りしてあります。昔から霊験赫々、願望成就の神として信仰厚く、他府県の信者は護摩堂（ゴマドウ）さんと称して、遙々と祈願を籠めて絶えず参詣されております。

*洞窟（御本殿真後）

僧行教上人、益信僧正修行の霊場であります。共に宮内に生まれ、幼少の時からこの洞窟に日夜籠って精進し、神仏の功徳を受けられました。兄行教上人は大和国大安寺に任え、第五十六代清和天皇貞観の年（八六〇）神の霊示により、九州宇佐八幡宮の御分霊を勧請元官幣大社石清水八幡宮を遙拝してお祀りした名僧であります。

弟益信僧正は第六十代醍醐天皇の御代大和国仁和寺を開き、奈良東大寺の別当を兼ね、後円城寺（石山寺）を建立して、仁和二年（八八六）伝法阿闍利の号を賜わり、延喜六年（九〇三）寂滅、後第九十五代花園天皇より本覚大師の称号を賜った高僧であります。

*大拝殿北側垣

桃型、扇子型、ひょうたん型のいろいろの珍らしい石を織り込んでおります。日本一の桃太郎を象徴する大神の古実に因んで築いてあります。御神徳の高い大神の大業をつくづくと偲ばしめます。

*宝物館

国の重要文化財を始め、数多の宝物が陳列してあります。観覧希望者は社務所へ申し出てください。

国重要文化財
（昭和十七年指定）

狛犬　一対

鎌倉時代作

高八〇センチ

国重要文化財（大正四年指定）

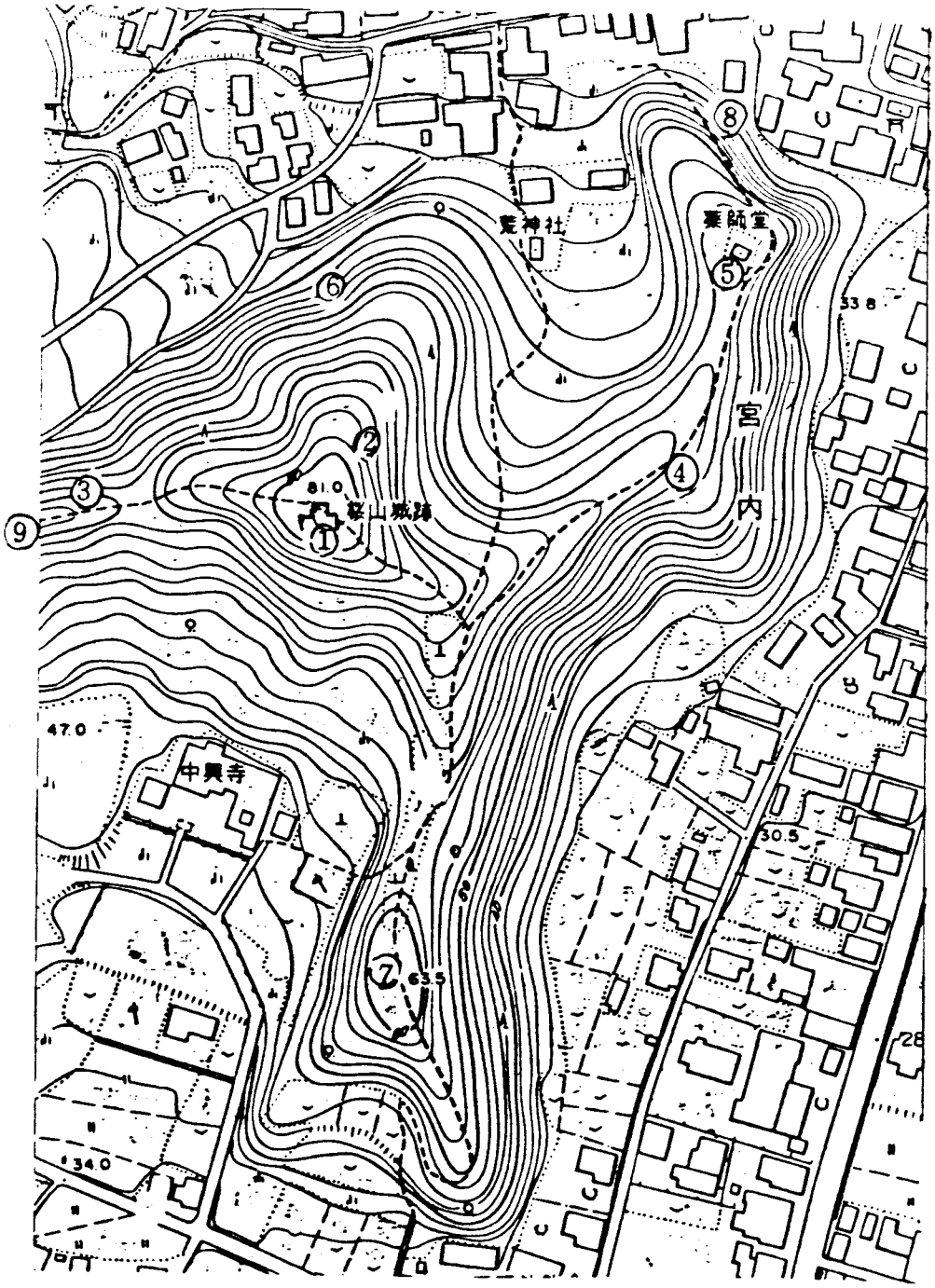
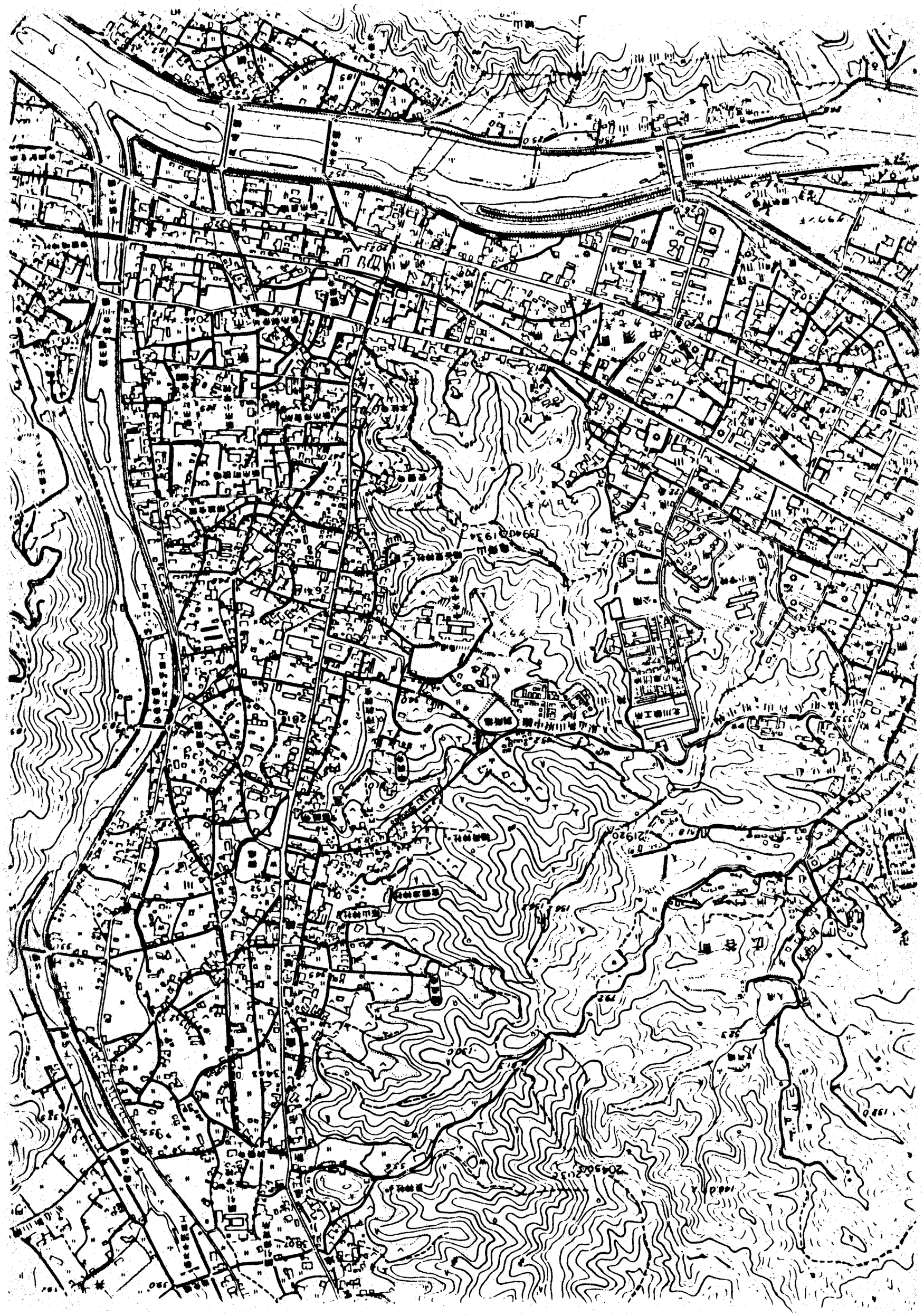
毛抜形太刀　二振　天文二十四年備州尾道五阿弥長行（一五五五）

二振　五阿弥正光（三原の刀工）

県重要文化財（昭和三十一年指定）

銅製錫杖頭　一柄　応仁三年之作（一四六九）　神仏混合時代祭儀に楽器として使用したもの。

毛利右馬頭元就は、武田出奔して後、彼の幕下の者共多く隨逐せしかば、藝州大半味方と成つて、武威日の昇るが如く月の恆なるが如く、日を逐ひ月を重ねて赫奕たれば、彌時の勢ひに乘つて備後國を切從へんと數日の廟算事畢り、先づ宮の下野入道が籠りたりける宮の城を攻めんとて、熊谷伊豆守信直、天野紀伊守隆重、香川左衛門尉光景、舍弟淡路守元忠已下二千餘騎、天文三年二月上旬に、吉田の城を立ちて、備後國へ發向し給ふ、宮下野入道はさる有功の士也ければ、敵の多たるをも事共せず、虛實時に出で進退機に應じて戰ひければ、急々に攻め取りがたく見えし所に、入道俄かに風病に由つて死去しぬ、嫡子若狹守は未だ弱年たりければ、當城よも堪へじと思ふ所に、家の子丹下の一族志を一致にして防禦の行を盡しける故、容易く陷るゝ事能はず、同七月三日元就城の麓へ押し寄せ、近邊の在家ども放火して、薄暮に及んで引き退き給ふ所に、丹下與兵衛五百騎計り打づて出でひた〳〵と後を付け來れり、日は黃昏になりぬ、所は無案内也、若し夜に入りなば、寄手引きかねたんと見る所に、香川左衛門尉光景、同舍弟元忠後殿して退きけるを、敵手強く付けたりければ、元忠取つて返し、丹下と渡合ひ突合ふを見て、光景も返して助け來りけるに、先に引きたりし熊谷も返し來ける間、丹下叶はじとや思ひけん、颯と引いて去りにけり、藝州勢も一二町追返して、其より引退き、駒を靜に歩ませければ、丹下も墓來らず、總軍心易く打入れけり、其後丹下二百三百にて度々打出で、足輕迫合しけるに、近國に鳴渡りたる大力の剛の者なれば、敵敢て近付かず、然る間丹下敵を方便んが爲に、動すれば手負ひたる眞似をして、或は倒れ伏し、又は片膝を折りて太刀を杖に突きなどしけるを、誠ぞと心得、敵近付けば、待受け岸破と起上りて切伏せける事、數箇度に及びぬ、又或時丹下、寄手の打出でたるに下し合せ、足輕迫合しけるに、甲冑を後へ裏かく許り射られて、手負ひたるぞ、味方は無きか、助け來れと呼はりけれども、又例の方便事也と思ひければ、敢て助くる味方無かりけり、藝州勢丹下が誠に手負ひたると看澄したれば、數十人落合ひ、終にそこにて討取りけり、丹下驛山に燈を擧ぐる例を知らずして、討たれけるこそ無慚なれ、かゝれば城中以ての外に弱り、冑を脱いで降膝を建てける間、頓て城を請取り、軍卒多く差しこめ、同十月中旬に元就歸馬を催さる、此勢に恐怖して、備後の國人等幕下に屬する者多かりけり、



松山城跡図